III. 潜伏キリシタンの共同体の維持・拡大

18 世紀の終わりになると、大村藩に属する西彼杵半島西岸の外海地域で人口が増加したため、五島列島などへの大規模移住が行われました。開拓移住者の中には多くの潜伏キリシタンが含まれていました。

潜伏キリシタンは、自分たちの共同体を維持するため既存の社会や宗教との折り合いをつけることを考慮して移住先を選択しました。例えば、平戸藩の牧場の跡地利用のため再開発の必要があった**黒島**⑦や神道の聖地である**野崎島**⑧のほか、病人の療養地として使われていた**頭ヶ島**⑨、五島藩の政策に沿って未開発地であった**久賀島**⑩が移住地として選ばれました。

IV.宣教師との再接触―潜伏が終わる

1854 年、アメリカをはじめとする西欧諸国からの相次ぐ開国の要求を受け、江戸幕府は下田と函館を貿易のために開港しました。次いで開港した長崎へと入った宣教師は、居留地に住む西洋人のために**大浦天主堂**⑫を建てました。天主堂が完成した直後、ひそかに信仰を続けてきた浦上村の潜伏キリシタンの女性が大浦天主堂の神父に信仰を告白しました。「信徒発見」と呼ばれるこの衝撃的な出来事により、長崎地方の潜伏キリシタンは転機を迎えました。

多くの潜伏キリシタンが信仰を表明したため、再び弾圧が強化され、潜伏キリシタンの集落では大規模な摘発が相次ぎました。このことは弾圧に対する西洋諸国からの強い抗議を招き、明治政府はキリスト教を解禁しました。

潜伏キリシタンの中には、禁教期を通して育んできた信仰形態を捨て、新たにやってきた宣教師の指導下に入ることを決めた者がいました。一方、宣教師の指導下に入ることを拒んだ者は、かくれキリシタンとして引き続き自分たちの信仰形態にとどまりました。また、神道や仏教へと改宗する者もいました。

やがて、かつての潜伏キリシタンは、**奈留島の江上集落**⑪のように自分たちの集落に素朴な教会堂を建て始めました。これらの教会堂は、カトリックの信仰活動が復活したこと、そして長崎地方の独自の信仰形態を育んだ 2 世紀半にわたる禁教下での潜伏時代がついに終わりを迎えたことの二つを象徴していました。

TABLE AT BOTTOM OF PAGE 3

長崎地方のキリスト教の歴史

I 始まり

1549 年　ザビエルにより日本にキリスト教が伝来
1614 年　全国にキリスト教禁教令発布
1637 年　島原・天草一揆勃発

II. 潜伏キリシタンの伝統の形成

1641 年　幕府が海禁体制を確立
1644 年　国内で最後の宣教師が殉教
1700 年　キリシタンは、潜伏して信仰を続けることを選択。 信仰が発覚しないよう「秘匿」を 基本とする信仰形態を育む

➡山や島、貝など身の回りのもの、 聖画像、神社などを崇拝

III. 伝統の維持・拡大

1797 年　外海地域から五島列島などへ移住開始

外海地域の潜伏キリシタンは自らの信仰を続けるため、移住先の社会や宗教との折り合いのつけ方を考慮しつつ移住先を選ぶ

➡黒島の集落、野崎島の集落、頭ヶ 島の集落、久賀島の集落

1859 年　オランダ船・中国船以外の外国船にも長崎が開港される

IV. 変容と終焉

1865 年　潜伏キリシタンが信仰を告白「信徒発見」

1873 年　キリスト教が解禁

1918 年　江上天主堂が完成 -

潜伏キリシタンの伝統が終焉